

海の上の地獄

岐阜県 後藤行男

昭和十九年十一月一日に広島港から貨物船四隻が大発動艇十二隻を分載して、マニラの野戦船舶工兵隊に引き渡すべく兵器率領の任務をおび、単身「南洋丸」に乗りこんでから約一か月、マニラの松山隊に無きで引き渡

した舟艇は二隻だけで、東支那海で自分の乗っている船以外の三隻の貨物船は敵の魚雷攻撃で大発動艇もろとも沈没した。よくも「南洋丸」は無事残ってくれた。目の前で味方の貨物船がつつぎに沈没していく、まして私の率領している大発動艇を積んでいる船が沈んでいくのを見ると、こんどはこの船もと、たえずびくびくしながらやっとの思いで台湾の南端カレン港に到着した。

ここまでに残った積荷の舟艇は四隻。なんとしてもこの四隻は比島で待っている松山隊に無事届けねばと思うのだが、大海原に木ノ葉のような存在の八千屯級の貨物

船、海まかせ波まかせ思うようにはならない。あとなんかバシー海峡だけ無事にわたればと思う。

ところがそのバシー海峡がおおあれの大嵐で、ついに渡ることができなくて高雄港に引き返した。二段積みになっていた舟艇は嵐のため荷くずれし二隻が破損、広島野戦船舶本廠に破損舟艇の処置を問い合わせた結果、二隻を高雄港の泛水作業隊に引き渡す。やっとなつた二隻は広島出航時積んだ六分の一で松山隊に引き渡したのがいつだったかおぼえていない。

いま思えば二十二歳の男がただ一人でこの大きな荷物を率領して、何回も事故に会いながらそれなりの処置をとり、なんとか目的地に到着したことが不思議なくらいである。

北支の山の奥地から兵十二人を連れて福山市にあった野戦船舶工兵隊に転属してきた時のことも、何日も何日も汽車や船を乗りついで、無事目的地に着いたことは、責任感と度胸が、そのつどいろいろの問題を解決してきたのだろうか。やっとなつた任務をはたして広島原隊本廠に帰ることができるかと思うとなんとなく気が楽になっ

た。

引き渡した舟艇の数が少ないので申しわけないと思いつながら、このところの戦況が思わしくないことが気がかりではあった。

一週間の松山隊での居候生活も終わり、朝、隊長に帰国の挨拶をおこない「鴨緑丸」に乗り込んだ。まっ白いペンキのにおいのする約一万屯の病院船で事務長に挨拶、指示された上甲板したの一等船室に入る。よくみると船首と船尾に機関砲と重機関銃が各一機ずつそなえてある。病院船は攻撃されないはずなのにと不思議に思ったが、病人以外の者に乗れば当然、攻撃されることが予想される。日本の情報は筒抜けのように敵方に知れる時期。案のじょう、病人は乗らなかつた一番船底に米軍捕虜が約二百人、二等船室に比島に移住していた日本人の引揚者（老人と女子供）数百人、また比島周辺で敵の攻撃によって船を撃沈されながら生きのびた百人をこえる貨物船の船員、そして軍人約百人ぐらいである。私のように単独の軍人は数少ない。それにこの船の兵器を扱う約二十人の兵士。

午前九時ごろ静かにマニラ湾を出航した。なにごともしなければ一週間もすれば広島に帰ることが出来るはずで、船のなかで私と同様に単身で内地に行く杉田軍曹と知り合い船中の行動を共にする約束をした。一人より二人、船のうえとはいえ心強い。

湾外に出た船は一路比島の西側を北上する。波は静かである。昼十二時に近いころ船橋のうえから「敵機来襲」という大声がおわるかおわらないうちに、もう機影がみえた。船に向かってまっすぐにつっこんでくる。艦載機グラマンの襲撃である。低い空から急に何機も出てくる。皆が船室と船室にはさまれた幅二メートルぐらいの通路に我さきにと逃げこみ、両耳に指でせんをしてふせる。機銃掃射の音、弾丸が甲板にパチパチと当たってはじける。この船の重機が応戦、火をはく。グラマンの数は十機近いと思われ、十数分の攻撃ののち引き揚げていった。

こうした攻撃の周期は四、五十分間隔だという。一回の来襲でかなりの死傷者がでた。この船に乗り合わせた衛生兵二人が死傷者をまんなかの通路に引っ張り込み、

皆も手伝って応急処置におおわらわ。この船の機関銃手にも負傷者が出た模様。つぎの襲撃にそなえて船底から銃弾を運びあげる者、真っ赤になるほど焼けた銃身を雑巾でひやす者、軍人、船員は皆力をあわせて動きまわる。この船が沈んだら助かることは少ないと思う。予告されていたとおり四、五十分で二回目のグラマンの攻撃である。

通路は負傷者と避難者でいっぱいである。十三ミリ機銃弾は甲板をつらぬいてくることはまれであるが、はねかえった弾がびゅんびゅんとんでくる。そのうちに大音響とともに甲板に大きな穴があいた。二十五キロ爆弾である。今度は被害は大きい。爆弾は三発命中、直径一メートル以上の穴が各所に。このままではいづれ沈没はまぬがれない。杉田軍曹が爆風で鼓膜をやられたらしく言葉がうまくつうじない。

船は危険を感じたらしく、とある湾内に入り浅瀬に乗りあげ、みずから座礁した。岸に一番近いところでも一キロ近くありそうである。今度は船は沈まないがとまっただままで攻撃を受けることになる。通路は死人と負傷者

と血の海である死者と負傷者の区別がつかない地獄とはこのようなことか。三回、四回と攻撃されるたびに死傷者はふえていく。

わが身可愛さにグラマンの襲撃とともに死人をふみつけても安全な通路の奥へと走りこむ。人間の醜さと「生」への執着をいやというほどみせつけられた思いであった。陸地の戦争では考えられないことばかり。

やがて陽が西に傾きかけるころ、艦載機の攻撃は終わった。船に乗りこんだとき甲板のうえに大きな軍人の遺骨箱の梱包が二個あった、数百柱もあろうかと思われた。どこか南の島で玉砕した英霊であったろうに、わずかになかに入っていた綿が飛び散っているだけでなんのあとかたもなかった。二回も戦死したようなこの人たちの英霊は内地の親元へ帰っただろうか。

三回目の攻撃はすさまじかった。逃げ遅れて通路の入り口で敵機の方向に頭を向け鉄帽だけをたよりにふせた。すこし頭を持ちあげて空をみるとグラマンが船に向かってまっすぐに急降下して突っこんでくるのがみえる。そのうちの一機がわが船の重機にやられて空中分解

するのが見えた。

あたりに機銃弾が雨あられ、はねかえりの弾丸が鉄帽にあたる。ハンマーで頭をたたかれたような感じ。いよいよこれまでの命かと思う。しかし今回も無事だった。ところが軍服の腕の部分のしわになってだぶついていたところに一三ミリ銃弾があたり、床の鉄板にはさまれたところに弾丸の鉛が焼きつけられていた。ミリの差で腕の負傷をまぬがれた。

また驚いたことに肩から掛けていた雑嚢を横から一発弾丸が貫通していた。三年前入隊するとき、家から持ってきたものではもうこれしか残っていない。洗面袋にも大きな穴があき、内地への土産と酒保品を現地人に横流しして無理してマニラで買った一個三十円と破格に高かったラックスの石鹼二個とも粉々になっていた。実に紙一重の命。いつ終わるやら、でも生への執着は終わらない。今晚のうちになんとかして陸にあげなければ。夜明けとともに、また襲撃が始まる。さいわい八隻ある救命ボートの内四隻ほど応急修理をして使えそうである。あとの四隻は蜂の巣のように穴だらけである。三回

も遭難したという船員もいて、海の上の作業はてぎわがよい。修理を終えた四隻のボートにつきつきと引揚者の老人、女子供を乗せる。船員がオールをこいでつきつきに陸地に向かっていく。一回に運ぶ人数はせいぜい三十人前後、このときは船員が乗り合わせてよかったとづくと思う。救命筏をおろして二人で陸へ向かう軍人もいた。ボートは船員が交代しては何回も何回も船と陸の間を往復する。船に残っている者からみれば一回いって帰ってくるまでの時間が長く感じ、待ち遠しい。

やがて日が暮れた湾内は波もなく静かである。しかしまだまだ半分の人もおかにあがっていない。必死に上陸作業は続けられた。はやく陸にあげたい気持ちはあるが我々軍人が最後まで残らなければと我に言い聞かせて上陸作業を手伝う。空腹と疲労がお互いの動作のなかで目にみえてきた。負傷者を含めて捕虜を除く生存者全員がおかにあがったのは夜中の十二時をとくに過ぎていたと思う。

誰が設営したのか、ここオロンガッポの小さな田舎町の各所に分散して民家を借受けての宿営である。我々軍

人は交代でそのまま不寝番をして民家の周囲を警戒してまわる。マニラの街でさえ裏通りに入れば軍人でも無事に帰れないほどの治安状況が悪い。どこからゲリラが出てくるかわからない。野犬を始め外敵から女、子供を護ってやらなければならないと思うのだが、疲労は極限に達している。

幼い子供は空腹と恐怖で朝まで泣き叫ぶ。それらの子の母は気がくるいそうに見える。家のまわりは糞尿で足の踏み場もない。

陸のうえまでも地獄は続いている。不寝番を下ばんして壁にもたれて仮眠をとるが、なかなか眠れない。昼間の出来事が思いだされる。とくに遺骨箱のゆくえが気になる。夜明けと共に甘藷の調達をしてやっと飢えをしのいだ。夜の間捕虜は残っていた筏とボートを使って向う側の山中へ逃げたという。何と皮肉なことだろう。

船底の捕虜は無傷だったはず、船に残してきた死者はどうなったのだろうか。

こうしてこの町に三日間おり、救助艦に助けられてマニラに逆戻り。もうマニラから内地へ行く船は出ないと

いう杉田軍曹は、もう船に乗るのはいやだといっていたが、果たして内地に帰ったのだろうか。

どうしても広島の本廠に帰るのだという執念がみのがさなかったと思う。何回も何回も銃砲弾と魚雷の洗礼を受けながら。